

# 「抑制から解放へ」

—『密偵』の一研究—

藤原 洋樹

倉敷芸術科学大学教養学部

(1999年9月30日 受理)

## I 序 論

長編小説の大作『ノストローモ』(*Nostramo: A Tale of the Seaboard*, 1904)と個人的な随筆『海の鏡』(*The Mirror of the Sea*, 1906)を書き上げた二年間は、ポーランド人で、およそ20年間の船員生活を経て、小説作家になったジョセフ・コンラッド(*Joseph Conrad*)の創作過程においては、船員時代の経験を基にして書かれた小説から離れ、小説作家としての真の意味での想像力が試された時期であり、彼が自分の小説作家としての力を出し切った二年間であった。筆者がこの小論で取り上げる『密偵』(*The Secret Agent: A Simple Tale*, 1907)は、『ノストローモ』に続く政治を背景とした長編小説の第二作目であり、『海の鏡』を完成してしばらく虚脱状態に陥った後書き始められ、彼としては珍しく中断されることもなく、比較的短期間のうちに一気に書き上げられた作品である。その背景、その登場人物達に対する嫌悪感から、当時の大衆読者達から、かなり批判を受けたようだが、コンラッドとしてはこの作品の形式と内容についての迷いは無かったと思われる。この小説は『ロード・ジム』(*Lord Jim: A Tale*, 1900)同様、最初は‘Verloc’という題名で短編として書き始められたが、結局長編として完結されたものである。1906年の10月から1907年の1月まで雑誌に連載され、単行本として出版される際に修正され、更に2万8千語加筆された。「作者の覚書」によると、コンラッドがこの作品を書くことを最初に思いついたのは、彼が或る友人と話をしていた時、アナキスト達と彼等の政治的活動に話が及び、1894年にイギリスで実際に起こったグリニッジ天文台の爆破未遂事件の犯人について、その友人が漏らした「ああ、あの男は頭が弱かったんだ。あの事件の後、彼の姉は自殺したよ。」(“Oh, that fellow was half an idiot. His sister committed suicide afterwards.”)(p. x)という言葉からだったということだ。更にその一週間後、コンラッドはこの事件が起こった時、警視監の地位にあった人の回想を綴った一冊の本に出会い、その中の警視監と時の國務長官ウィリアム・ハーコート卿(*Sir Willam Harcourt*)とのやりとりの雰囲気更に更には触発され、彼は大都市ロンドンを舞台とし、ヴァーロック夫人(*Mrs. Verloc*)の激しい母性愛と、彼女の「人生はあまりつきつめて考えるに値しない」(*life doesn't stand much*

looking into) (p. x iii) という人生哲学を中心に据えた作品を書こうという気になった、ということである。

筆者が『密偵』を読んで気になる点は三つある。第一は、この作品には A Simple Tale という副題がついているが、内容においても形式においても、決して「単純な」という形容が当てはまらない作品であるということである。第二は、作者はこれはヴァーロック夫人の物語だと述べているが、彼女が物語の中心に置かれるのは、全13章のうち3分の2が終わって第11章になってからであり、とても彼女が主人公とは思えないことである。更に第三は、発表当初批判を受けた点に関連したことであるが、この作品には陰惨な雰囲気が漂い、全ての登場人物達の鬱屈した不満がブスブスと燻っていて、明るさが見えてこないことである。この小論では、これらの三つの気になる点を出発点とし、この作品の文章の特徴を調べ、主題を探りながら、最終的には作者の意図にまでたどり着くことが目標である。

## II 本 論

この作品の文章の特徴を調べていく手順を決定するにあたって、第1章の最初の段落は重要なヒントを与えてくれる。

Mr. Verloc, going out in the morning, left his shop nominally in charge of his brother-in-law. It could be done, because there was very little business at any time, and practically none at all before the evening. Mr. Verloc cared but little about his ostensible business. And, moreover, his wife was in charge of his brother-in-law. (p. 3)

ヴァーロックの店が名目上は義弟「にまかされていて」、顧客が非常に少なく、みせかけの商売であり、彼の妻が義弟の面倒「をみている」という書き出しは、ヴァーロックという男と彼の家庭と仕事に対して、読者に疑問を抱かせることによって読者の関心を見事に引き付け、この後のストーリーの展開に対する期待感を高める効果を十二分に発揮している。又同じ 'in charge of' を二つの意味で用いているのも興味深い。語(句)の段階から小説全体の段階に至るまで、この作品に広がりを持たせ、読者の想像力をかき立てようとしている作者の意図が感じられる。

作者自身が与えてくれているヒントに従って、筆者は次のような手順で文章の特徴を調べていきたいと思う。

- (1)語(句) について (a)登場人物の性格・特徴を表すもの (b)登場人物或いはその人物の考え方の類似・対照を暗示するもの (c)皮肉が込められているもの (d)言葉遊び的なもの
- (2)文(章) について (a)登場人物の性格・特徴を表すもの (b)登場人物・グループ或いはその考え方の類似・対照を示すもの (c)皮肉が込められているもの

の (d)重要なことへの伏線となっているもの (e)ユーモアも含めた  
文学的表現

(3)作品全体について (a)時間の破壊 (b)皮肉な手法

(1) 語(句) について

(a)登場人物の性格・特徴を表すもの：この作品の題名の密偵とはヴァーロック (Mr. Verloc) のことであるが、彼には ‘heavy’ が多用されている。彼は表面上はアナキスト仲間の一人として活動しているが、実は△という符牒を持ち、かつては非常に有名だった某大使館 (作者はロシアだと臭わせている) の密偵である。しかし現在のヴァーロックは妻を持ち、身体的に見ても太っており、生活態度も怠惰そのものであり、とても密偵として相応しいとは思えないという作者の皮肉が、この ‘heavy’ に込められている。ヴァーロックの妻のウィニー (Winnie) には、‘unfathomable’ が付きまとう。ウィニーはヴァーロックが好きで結婚したのではなく、頭の弱い弟のスティーヴィー (Stevie) のことと、経済的理由のために、その時付き合っていた近所の肉屋の息子と泣く泣く別れて彼と結婚したのであり、彼女はその時以来自分の感情が表に出ないように、言わば「抑制」という仮面をかぶり続けてきたのである。「仮面」(mask) は、第9章の最後に出て来る。その場面では、ウィニーがグリニッジ天文台の爆破未遂事件でバラバラの死体に解体されてしまったのは、スティーヴィーであり、そうなったのはヴァーロックのせいだと知って、両手で顔を覆って、悲しみをこらえている。

The palms of her hands were pressed convulsively to her face, with the tips of the fingers contracted against the forehead, as though the skin had been a mask which she was ready to tear off violently. (p. 212)

又彼女は序論で引用した人生哲学を持ち、何事に対しても深く考えようとはせず、無関心な態度をとり続けている姿はまさに ‘unfathomable’ と言える。ヴァーロックのアナキスト仲間で、ドクターという徒名を持つ大柄なオシボン (Ossipon) にあてがわれた形容詞は ‘robust’ である。彼は第4章で、号外によって爆破未遂事件のことを知り、自分の尻に火がつくことを心配しながら或る酒場に入ってみると、たまたまそこでビールを飲んでいる通称プロフェッサーに出会う。プロフェッサーは、この章が始まってしばらくの間その正体が伏せられ、‘the little man’ と呼ばれているが、オシボンはこの尊大でいかにも自信に満ちた態度を取っている男を目の前にすると、その態度に圧倒され、萎縮してしまい、落ち着きを失う。作者は対照的な身体を持ったこの二人のアナキストを出会わせることによって、彼等をそれぞれ形容している単語と彼等の態度の皮肉な齟齬に読者の目を向けさせている。更にオシボンはヴァーロックがウィニーによって刺殺された後、彼女を騙して所持している大金を奪い、結局彼女を自殺に追いやる結果になるのだが、この彼の行

為も ‘robust’ という単語で形容されている男にはあるまじき行為である。‘foreign’ という形容詞がつけられているのは、中間管理職的な立場にある警視監 (the Assistant Commissioner) である。彼には他の中心的役割を果たす登場人物とは異なり、名前が書かれていない。それは、彼がこの大都市ロンドンでは異質な存在であり、アイデンティティーが認められていないということを意味している。

(b)登場人物或いはその考え方の類似・対照を表す：作者は第2章でヴラジミールに ‘science’ を多用させており、第3章でオシポンは ‘scientifically’ を使い、更に第12章で作者はオシポンのことについて、‘science’ と ‘scientific’ を多く用いている。作者は立場の異なるこの二人の男は、科学至上主義的な考え方に支配されているという共通点があることを、読者に知らせたいのである。第1章でヴァーロックの義母が、ヴァーロックに関して、又第2章でヴァーロックもヴラジミールのことに関して、‘gentleman’ を使っている。ヴァーロックの義母の場合は彼に対する尊敬の念を込めており、ヴァーロックの場合はヴラジミールを罵り、皮肉を込めているわけなのであるが、読者はヴァーロックの義母の場合も、彼女自身はそうするつもりはないのだが、結果的にはやはり皮肉が込められているという印象を持たせられる。第4章でプロフェッサーが、そして第6章で特別犯罪部のヒート警部が、アナキストと警察の対立関係を ‘game’ で表している。プロフェッサーはこの二つのグループが怠惰であるというマイナスの意味合いにおいて類似していると述べているのに対して、ヒートはこの二つのグループの慣習的倫理感に基づいた関係を、プラスのイメージで捕らえようとしている。

(c)皮肉が込められているもの：(c)で挙げた ‘gentleman’ は、この項目の例でもある。ヴァーロックを形容している ‘good’ は、‘gentleman’ と同様ヴァーロックの義母とステイヴィーの気持を表しているが、二人の気持とは裏腹に作者の皮肉が込められている。ヒートに ‘excellent’ が使われているが、第5章でヒートが高官〔国務長官のサー・エセルレッド卿 (Sir Ethelred) だと思われる〕に対して、目下のところアナキスト達には不穏な動きのないことを確言して一週間も経たないうちに、グリニッジ天文台の爆破未遂事件が起こり、大いに面目を潰したことに関連して、作者は「彼は賢くはない」(But Chief Inspector Heat was not very wise—at least not truly so.) (p. 84) と述べており、‘excellent’ にも作者の皮肉が込められていることが伺える。第5章で警視監の結婚に対して皮肉なことに ‘good’ と ‘excellent’ の二つの形容詞が使われている。(It was a good match from a worldly point of view, . . . It was an excellent match.) (p. 99) 彼は妻の我が儘のために現在の気に入らない職に就いているのであり、彼女は「およそあらゆる種類のせせこましい我が儘、嫉妬に毒された女である。」(his wife, a woman devoured by all sorts of small selfishnesses, small envies, small jealousies,) (p. 112) と作者は述べている。

(d)言葉遊び的なもの：第2章でヴァーロックの怠惰に対する徹し方に関して、「ものぐさな熱狂ぶり (inert fanaticism) といつか、むしろおそらくは熱狂的なものぐさぶり (fanatical

inertness) を發揮して」(p. 12) というように、形容詞と名詞を逆に入れ替えた表現を並べて用いている。又第5章で、部局に勤める人間の、部局に対する気持を述べているところで、「忠実な献身」(loyal devotion)(p. 90) と「献身的な忠誠」(devoted loyalty)(p. 91) という表現が並べて用いられている。第3章でヴァーロックは人間の社会組織に反抗する人間達のことについて思わず考え込んでしまうが、その場面で作者は形容詞或いは名詞を連ねて使っている。

The majority of revolutionists are the enemies of discipline and fatigue mostly. There are natures, too, to whose sense of justice the price exacted looms up monstrosly enormous, odious, oppressive, worrying, humiliating, extortionate, intolerable. Those are the fanatics. The remaining portion of social rebels is accounted for by vanity, the mother of all noble and vile illusions, the companion of poets, reformers, charlatans, prophets, and incendiaries. (p. 53)

ここでは、ヴァーロックの取り留めの無い思考形態が、同じ品詞の単語を積み掛けるように用いることによってうまく表わされており、又軽蔑感を込めて語っている人間達の特徴が、正に彼自身の特徴そのものであることに、全く気づいていないヴァーロックの愚鈍さも感じさせるものである。この表現は作品全体に見られ、又「闇の奥」(‘Heart of Darkness’, 1899) でも、不気味な雰囲気醸し出す方法として、頻繁に使われているものであり、コンラッドの作品の文体の重要な特徴となっているものである。

## (2) 文(章) について

(a)登場人物の性格・特徴を表すもの：序論で触れたウィニーの人生哲学も、再三再四途中でくどいくらい繰り返されるが、これも一例である。第3章でアナキスト仲間が、ヴァーロックの家の応接間で議論を闘わせている様子が描かれているが、義弟のステイーヴィーは隣の台所のテーブルに向かって、紙の上に円を描くことに熱中している。

... and thus disclosed the innocent Stevie, seated very good and quiet at a deal table, drawing circles, circles, circles; innumerable circles, concentric, eccentric; a coruscating whirl of circles that by their tangled multitude of repeated curves, uniformity of form, and confusion of intersecting lines suggested a rendering of cosmic chaos, the symbolism of a mad art attempting the inconceivable. (p. 45)

作者はステイーヴィーの円を描く行為を、「宇宙的混沌の表現」であり、又「想像できないものを描こうとする狂気の試み」だと述べ、オシポンは「退化の象徴」(“Typical of this form of degeneracy—these drawings, I mean.” (p. 46) だとヴァーロックに語っているが、この円はヴァーロックの密偵としての符牒である△と対照をなすものであり、ヴァーロックに欠けている人間的優しさをステイーヴィーが持っている、ということも示している。第10

章で、ウィニーが弟スティーヴィーの死を悲しみ、彼の死を齎した夫ヴァーロックに対する憎しみを募らせている時、作者はヴァーロックの無神経さについて述べている。

The mind of Mr. Verloc lacked profundity. Under the mistaken impression that the value of individuals consists in what they are in themselves, he could not possibly comprehend the value of Stevie in the eyes of Mrs. Verloc. (p. 233)

ヴァーロックは、スティーヴィーという頭の弱い義弟の一個人として的人間的価値を認めず、又妻のウィニーがヴァーロックに対する愛のために結婚したのではなく、頭が弱く一人前の人間として生きていくことの難しい弟のスティーヴィーのために、自分の気持を犠牲にして結婚したとは、夢にも思っていないので、ウィニーの取り乱し方が理解できない。作者はここで、ヴァーロックは生活態度においても怠惰であるが、精神・感情の面でも怠惰であり、「想像的な思いやり」(imaginative sympathy) に欠けていることを示している。

(b)登場人物・グループ或いはその考え方の類似・対照を示すもの：第4章でプロフェッサーはオシボンに自らの持論を開陳している。

“... Their character is built upon conventional morality. It leans on the social order. Mine stands free from everything artificial. They are bound in all sorts of conventions. They depend on life, which, in this connection, is a historical fact surrounded by all sorts of restraints and considerations, a complex, organized fact open to attack at every point; whereas I depend on death, which knows no restraint and cannot be attacked. My superiority is evident.” (p. 68)

爆弾を研究製造し、常に爆弾を身につけて持ち歩いているプロフェッサーは、死を恐れず、慣習に縛られず、従って抑制ということを知らないということを根拠に、警察に対する優越性を主張しているのだが、自分の優越性を確保するために、爆弾を持ち歩かざるをえないということ自体が一つの抑制である、ということに気付いていない。第5章でヒートは最悪の精神状態でプロフェッサーと出会い、その反動から以前その取締の任に当たっていた泥棒達の世界のことを懐かしく思い出す。

... the mind and the instincts of a burglar are of the same kind as the mind and the instincts of a police officer. Both recognize the same conventions, and have a working knowledge of each other's methods and of the routine of their respective trades. They understand each other, which is advantageous to both, and establishes a sort of amenity in their relations. Products of the same machine, one classed as useful and the other as noxious, they take the machine for granted in different ways, but with a seriousness essentially the same. (p. 92)

ヒートは警察と泥棒達の中に慣習的倫理感に基づいた類似点のあることを示しているのだが、これは世の中の善悪・正邪の区別つまり倫理感が曖昧になっていること、即ち大都市ロンドンの道徳的腐敗を象徴している。第2章でヴラジミールは、巧みな機知を駆使して、社交界の寵児のような存在になっているが、彼の「調和しない考え方の間におかしな関係を見つける」(discovering droll connections between incongruous ideas) (p. 19) という機知は、そのまま作者の機知に繋がっている。(1)の(b)も同様であるが、作者は異なった登場人物のものの考え方に類似点のあることを、同じような言葉・表現を登場人物自身に使わせるか、或いは作者が使うことによって、読者に知らせ、その皮肉を指摘するとともに、内容的な広がりを用意している。

(c)皮肉が込められているもの：(1)の(d)で触れたことであるが、作者はヒートは賢くはないと語っているところで、その理由を述べている。

True wisdom, which is not certain of anything in this world of contradictions, would have prevented him from attaining his present position. It would have alarmed his superiors, and done away with his chances of promotion. His promotion had been very rapid. (p. 84)

作者はヒートの人間的な資質と、社会の彼に対する評価の齟齬を皮肉っているわけであるが、この点に関しては、逆の立場にあるプロフェッサーが社会の自分に対する評価に不公平感を抱いていることにも繋がり、更に大衆読者の自分の作品に対する評価が低いことを、嘆いている作者コンラッドの絶望感にも繋がっていると思われる。

(d)重要なことへの伏線となっているもの：第3章でウィニーがヴァーロックに、以前オシボンが店に持ち込んできたパンフレットの中に、「或るドイツ人将校が初年兵の耳を半分引きちぎったのに、何の処罰も無かった」という話をステイーヴィーが読んで、宥めることのできない位興奮したと話し、更に次のように語る。

“... He can't stand the notion of any cruelty. He would have stuck that officer like a pig if he had seen him then...” (p. 60)

ここでドイツ人将校が「豚」に譬えられていることは、(1)の(b)で触れた「太った豚」に譬えられたヴァーロックのことを、読者は思い出すが、このウィニーの言葉は、第8章で述べられているウィニーとステイーヴィーの顔付きの相似 (... their resemblance to each other was so pronounced as to strike the casual passers-by.) (p. 170) と相俟って、第11章のウィニーによるヴァーロックの刺殺への伏線を形成している。

(e)ユーモアも含めた文学的表現：第3章でヴァーロックのアナキスト仲間であるカール・ユントのテロリストとしての面影が、ユーモアを感じさせる直喩を用いて、見事な文学的表現となって結晶している。

The shadow of his evil gift clung to him yet like the smell of a deadly drug in an old vial of poison, emptied now, useless, ready to be thrown away upon the rubbish-heap of things that had served their time. (p. 48)

ここにはヴァーロックを始めとして、仮出獄中の唱導者マイケリス、オシボンも含めた四人のアナキスト連中の無力さが、象徴的に示されている。第5章でヒートを前にした警視監は、上司としての威厳を保ち、部下に揚げ足を取られないように用心深く話す。

His thought seemed to rest poised on a word before passing to another, as though words had been the stepping-stones for his intellect picking its way across the waters of error. (p. 98)

警視監のこの用心深さは、ポーランド語、フランス語に続く三番目の言語である英語を用いて小説を書いている作者コンラッドの、「内容」に相応しい「形式」を模索して苦しんでいる姿を彷彿とさせるものであり、読者にとっては見過ごすことのできない重要な意味を持っているものである。第6章で警視監は現在の自分の仕事・地位に対して嫌悪感を持っていることが述べられている。

A square peg forced into a round hole, he had felt like a daily outrage that long-established smooth roundness into which a man of less sharply angular shape would have fitted himself, with voluptuous acquiescence, after a shrug or two. (p. 114)

「丸い」とか「丸さ」は慣習的倫理感を、又「四角い」は慣習的倫理感とは相いれない異質なものの即ち想像力を暗示している。警視監は自分の部屋から飛び出し、部下のヒート（慣習的倫理感を象徴している）の存在を飛び越えて、直接ヴァーロックに会い、爆破未遂事件の真相を聞きだす。更に彼はヴァーロックの口から事件の黒幕であるヴラジミールの存在を知り、第10章でヴラジミールをやり込めてしまう。第7章で警視監がヴァーロックの家を訪ねるために乗った馬車から降りる時に、御者にお金を渡す。

... and his education not being literary, he remained untroubled by the fear of finding it presently turned to a dead leaf in his pocket. (p. 148)

語(句)の特徴の中に言葉遊び的なものがあったが、これはユーモアに富んでおり、表現遊び的なものと言える。

### (3) 作品全体について

(a)時間の破壊：第4章からこの小説の章の配列の時間的順序が破壊されている。時間的順序に従って配列すれば、第1章から第3章まで、それから第8章に跳んで第9章の201頁22行目まで、そして第4章に戻って第7章まで、最後に第9章の201頁23行目から終結ま

でとなる。第2章でヴァーロックはヴラジミールに、密偵としての役目を果たすには太り過ぎていて、最近何年間か殆ど働きらしい働きをしていないことについて散々嫌みを言われ、これまで持ち続けていた、密偵としての誇りをズタズタにされた後、途方もない指令を受ける。それは、現在ミラノで開催されている国際会議で、政治的犯罪の抑止のために国際的行動を起こそうと話し合われているが、イギリスの態度がはっきりしないので、何か人間の想像を絶したテロ行動を起こしたいというもので、具体的にはグリニッジ天文台の爆破という指令であった。グリニッジ天文台は、そこを本初子午線が通り、世界標準時を司っている場所である。従ってこの天文台の爆破は、時を破壊することを意味し、更にこの小説の章の配列における時間的順序が破壊されていることに繋がっている。ヴラジミールの語るところによると、その指令の根拠は、現代人の呪物崇拜の対象は科学であるから、科学の一つの象徴とも言える天文台を爆破すれば、大衆の言い知れぬ恐怖を呼び起こし、イギリスの警察も本気になってテロリスト対策に乗り出すだろうというのである。この人間的な優しさの感じられない一介の官僚的人物の出した途方もなく不条理な指令が、ヴァーロックの心の平安を乱し、この作品のストーリーを悲劇的結末へと動かしていく。この指令は又登場人物達特にウィニーの慣習的倫理感に衝撃を与え、彼等の想像力を揺さぶる結果を齎すことになるのである。第4章でオシポンは、プロフェッサーから爆弾を渡した相手の男がヴァーロックだと聞かされ、てっきり爆死した男はヴァーロックだと信じ込んでしまう。読者も作者の巧みな時間の破壊によりオシポンと同じように誤解するが、ヒートが最初に現場に駆けつけた警官の聞き込みの報告から、爆死した男は金髪でほっそりした体の持ち主であるということを知り、更に警官がショベルで削り取るように集めたものの中から、オーバーの襟の裏側に縫い付けられヴァーロックの住所の記された三角形の布を見つけたことを知らされて、死んだのはスティーヴィーの方だと覚る。読者は又ヴァーロックがスティーヴィーを使って爆弾を運ばせたのだということも知らされる。しかし第12章でウィニーがヴァーロックを刺殺した後、以前何かの本で読んだことのある絞首台のことを思い出し、急に恐怖に襲われて表に飛び出して行き、当てもなく歩いている時に、オシポンと出会うが、彼はまだ爆死したのはヴァーロックだと思い込んでいたので、この二人はかみ合わない会話を交わす。彼等の誤解は、この作品全体に溢れている‘secret’ ‘secrecy’ ‘private’ という単語と同じように、人間同士のコミュニケーションの不在を暗示している。作者の時間の破壊によって、後に回された第8章で、ヴァーロックの義母がスティーヴィーの将来のことを思いやって、施設に入居するため、ウィニーとスティーヴィーを伴って、痩せこけた馬に引かれたガタガタの馬車に乗っている場面が描写されるが、その時作者は「時間が止まっているように思われた」(-and time itself seemed to stand still.) (p. 157) と述べている。これは時間的配列に従えば第3章の次にこの第8章が来るのだということ、作者がそっと教えてくれているようで、非常に興味深い。

(b)皮肉な手法：この作品には「青春」(‘Youth: a Narrative’, 1898)、「闇の奥」、『ロー

ド・ジム』、『運命』(*Chance: A Tale in Two Parts*, 1913)の中で、コンラッドが彼らしい小説を生み出し、小説家としての自信と名声を確立するのに大きな役割を演じたマーロウという語り手は登場せず、全知の語り手即ち作者が物語を語り、コメントを加えている。上に挙げた四つの作品で、コンラッドはマーロウという語り手を登場させることによって、描く対象から丁度都合の良い距離を保つことができ、言わばマーロウという一枚の膜を通して、作家としての想像力を自由に駆使することができたと思われるが、『密偵』においてマーロウという語り手に代わる役目を果たしているのは、この作品全体に流れている皮肉な手法であると思われる。斜めに構えることによって、一枚の膜を作り、描く対象との心理的距離が取れたのではないだろうか。コンラッド自身、『作者の覚書』の中で、この作品で自分の言いたいことを十分表現するためには、皮肉な手法以外には考えられなかったと述べている。

Even the purely artistic purpose, that of applying an ironic method to a subject of that kind, was formulated with deliberation and in the earnest belief that ironic treatment alone would enable me to say all I felt I would have to say in scorn as well as in pity. (p. x iii)

### Ⅲ 結 論

『密偵』という小説は、作者コンラッドが皮肉な手法を用いて書いたものであり、語(句)の段階からその意図が徹底している。ヴァーロックという密偵には相応しくない人物を登場させていることは、必然的に題名の『密偵』には作者の皮肉が込められていることを暗示している。従って読者が、a simple tale という副題の simple という単語にも作者の皮肉を読み取っても何らおかしいことではない。第8章でウィニーがヴァーロックに、母親が施設に入ってしまったことを告げた時、ヴァーロックは、「多分そのほうがやっぱり良かったよ」(“Perhaps it’s just as well.”) (p. 178) と答える。その答えに対してウィニーは、どのように、何故良かったのかという疑問を感じ、さらに彼女は「単純明快なことを言ったつもりでも、それが幾通りもの別の意味を、それもたいていは不愉快な意味を持ちうることを痛感した。」(… and it was born upon her with some force that a simple sentence may hold several diverse meanings—mostly disagreeable.) (p. 178) と感じるが、ここで使われている simple という言葉は、副題で使われている simple と同じものである。意味において抑制を受けている語(句)が、作者の皮肉な手法によって解放され、もっと自由な広がりを持つようになっている。この点においては、言葉遊び的なものと表現遊び的なものに、その最も顕著な例が見られる。

ヴァーロック夫人即ちウィニーは本論でも述べたように、彼女の意に反してヴァーロックと結婚するが、彼が彼女を裏切った形で弟のステイーヴィーを死に追いやったと知った

時点で、ヴァーロックとの婚姻関係という抑制から解放されて自由な身になったと感じ、作者は第11章の251頁からしきりに「彼女は自由な女だった」と繰り返している。この小説の登場人物達は全て自分の意に添わない、自分を抑制するものに苦しめられ、それから脱れようとしている。作者が『密偵』はヴァーロック夫人の物語だと述べているのは、彼女に象徴されている抑制と、抑制からの脱出即ち解放ということが、この小説の主題だということを言いたかったのではないだろうか。彼女は夫を殺すという形で抑制から脱出したが、結局船から海に飛び込んで自殺してしまうという解放の形しか手に入れることができなかったという結末は、モラリストらしい作者コンラッドの最大の皮肉だと言える。

最後に筆者がこの小説を読んで思いついたことを述べて終わりにしたい。それは登場人物の Verloc という名前のことであるが、verloc という名前は作者が clover という単語のスペルを入れ替えて作った名前ではないだろうか。密偵バーロックの符牒は△であり、3 という数字が入っており、植物のクローバーは三つ葉ではなく四つ葉のものが幸せを齎すとされているからである。ヴァーロックは、妻のウィニーを始めとして義母にも義弟のステイヴィーにも幸せを齎しはしない。英和辞典の clover の欄には like pigs in clover (安楽に、この上なくしあわせにく暮らすなど)<sup>1)</sup> という慣用表現が載っており、作者は第1章でヴァーロックのことを皮肉にも「太った豚」(fat-pig) に譬えている。

テキストは *The Secret Agent*, Medallion Edition, The Gresham Publishing Co. Ltd., London, 1925 を使用し、引用の頁数は全てこのテキストのものである。又テキストの日本語訳に関しては、土岐恒二氏訳の岩波文庫版をかなり参考にさせていただいた。

Notes :

- 1) *Kenkyusha's English-Japanese Dictionary For the General Reader*, Second Edition, 1999, p.478

Restraint and Liberation  
— A Study of *The Secret Agent* —

Hiroki FUJIWARA

*Faculty of College of Liberal Arts and Science,*

*Kurashiki University of Science and the Arts,*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received September 30, 1999)

In spite of the sub-title of *The Secret Agent* and what Joseph Conrad writes about the novel in its Author's Note, it is neither a simple tale nor exactly a tale about Mrs. Verloc. I was much impressed by its author's deliberately ironical treatment of it and by the fact that every one of its characters suffers from his own specific restraint in a sordid atmosphere of London at the end of the 19th century.

In this survey I want to analyze its style and get to the knowledge of what its author wants to make us see.